

GILLETTE & L'ORÉAL, WOMEN USA

Alabama • Alaska • Arizona • Arkansas • California
Colorado • Connecticut • Delaware



GILLETTE & L'ORÉAL, WOMEN USA — VOL. I

L'ORÉAL THROUGH GILLETTE · 00

アメリカ横断の最初の行程：アラスカ、アリゾナ、アーカンソー、カリフォルニア、コロラド、コネチカット、デラウェア。シリーズ全6巻に共通する北極のプロローグ、第0章で幕を開ける。

第0章 — 共通の序章

この序章は『*Women of the United States*』全6巻に共通している。ここでは全文を収め、シリーズを繰り返しなしに順に読めるよう、折りたためるようにしてある。

第0章

ここでは、世界は領土ではない。限界である。北極は迎え入れない。赦さない。誤りの余地を残さない。白が絶対の存在として君臨する。静かで、記憶をもたない。気温は気象データではない。捕食者だ。夜は何か月も続き、思考を押しつぶし、人の輪郭を歪め、意志を呑み込む。

共同体は少なく、小さく、閉じている。イヌイット、ユピック、北極の民は、誰も留まろうとは選ばない場所に暮らしている。ここでは一人ひとりが集団の生存に欠かせない。役に立たなければ、重荷になる。そして重荷になった者は、沈黙の中へ、雪の中へ、何ひとつ譲らない環境の論理の中へと消えていく。

科学基地は、もうひとつの種類の冷たさを加える。序列という冷たさだ。ここで女は稀な存在であり、適応するか屈するかしかない異物である。

この場所に「失踪」という概念は存在しない。あるのは、すべてを消し去る白だけだ。

イヌイットとユピックの女たち

北極の少女は甘やかされない。鍛えられる。寒さに、闇に、飢えに耐えることを早くから覚える。氏族の役に立たなければならぬ。ここでは、アイデンティティは個人のものではないからだ。それは機能である。女は家族と共同体の重荷を背負う。食べ物、火、子ども、毛皮、世話。権利について語る者はいない。脆さについて語る者もない。うつ病は存在するが、名前がない。暴力は存在するが、証人がいない。

科学基地の女

教育があり、有能で、規律に慣れている。研究者として、技術者として、医師としてやって来る。そしてすぐに知る。北極は資格を認めないことを。ここで意味をもつのは精神の強さだけだ。男たちの序列が彼女を支配し、弱さのわずかな兆しも弱さとして解釈される。強さだけでは足りない環境である。求められるのは極限の自制だ。

西洋から来た「よそ者」の女

自由の中で育ち、寒さを征服できると信じてやって来る。だがこの場所は彼女を打ち砕く。孤独、狭い空間、果てしない沈黙。基地は共同体ではない。機構である。そして男たちが設計した機構の中で、女は消えないために闘わなければならない。

世界の果てへの旅

隣人のアントニオ、通称ニーノは、何年も前からノールカップのこと、真夜中の太陽のこと、闇のない何か月ものことを話していた。それは彼がポケットにしまっていた夢だった。叶うはずのないもののよう。5月のある朝、私は彼の家の呼び鈴を鳴らし、

ただこう言った。「スーツケースに荷物を詰めてくれ。1時間後に戻る。帰りは30日後だ」。彼は驚き、うれしそうに私を見た。心配した彼の妻が、私たちの計画を尋ねた。「夢を追いかけて行くんです」と私は答えた。

私たちは車に乗り込んだ。妻たちは、正気を失った男たちを見るような目で私たちを見ていた。だがこの旅は本物だった。ニーノはもう質問だらけだった。「どこへ行くんだ？ 金はいくら持っていけばいい？」「落ち着いて」と私は言った。「54時間で着く。たった5000キロだ。新しいRange Roverに乗っているんだ。ドライブを楽しんでくれ」

300キロごとに車を止めなければならなかった。私より12歳年上の彼には、彼のリズムがあった。私には水と飲み物があり、彼にはコーヒーと体の用があった。そして先へ進むほど、彼は自分の人生について語った。あの果てしない道がなければ、私が決して知る事のなかったことを。

車の中に男が二人きりでいれば、話すのはいつも女のことだ。彼は妻しか知らなかった。私は笑った。そして安心させた。「私たちだって同じですよ」

60時間も運転してどうして正気でいられるのかと、彼は尋ねた。私はロシアの話をした。22歳のとき、一度も会ったことのない女に会うために51時間運転したことを。「距離は限界じゃない」と私は言った。「言い訳だ。私には言い訳なんてひとつもなかった」

白の中への到着

私たちはノルウェーに入った。道沿いの宿。車をそこに置き、櫓で先へ進むことになっていた。

ガイドは全身を覆い、何も読み取れなかった。ゴーグルを外したとき、女だとわかった。ノルウェーの女。無口で、率直で、氷の

ようだった。ニーノは櫓の真ん中、彼女が先頭、身長190センチの私が後ろで最後尾を務めた。

まだ明るかった。時計は時刻を示していたが、夜なのか朝なのかは教えてくれなかった。真夜中の太陽だった。私たちはノールカップにたどり着いたのだ。

ニーノは泣いた。私を抱きしめた。私は笑いながら言った。「気をつけて……ゲイだと思われるかもしれない」。私たちは笑った。だが、私たちは世界の果てにいた。

それから凍てつく寒さが来た。氷点下52度。

真の北極への入口

私たちは着替えのために金属のコンテナへ連れていかれた。ひどく重い、詰め物の入ったスーツで、複雑なファスナーで閉じるものだった。

私はガイドの代金を払った。ニーノは数人の男たちと一緒にイグルーに残され、私は別のイグルーに、ある家族と一緒に残された。70歳から80歳くらいの年老いた男と、30歳から50歳くらいの三人の女だった。

閉じた世界だった。単純で。残酷な。

男は脇に控えていた。女たちが暮らしを回していた。そしてトイレはイグルーから5メートル先の小山だった。うんちは地面に着く前に凍った。私の最初の小便は黄色い北極の星になった。北が私に挨拶していたのだ。

中年の女、マギは少しだけ英語を話した。あとは身振り、目、手。寒さの言葉だった。

私がスーツの使い方に迷っていると、彼女はためらいもなく私の股間に触れ、隠れたファスナーを教えてくれた。悪意はなく、恥じらいもなかった。ただの機能だった。生き延びるための。

イグルーでの三日間

彼女たちは食べ物を運んできた。燻製の魚、生の魚、タラの肝臓、クジラの腹肉。そしてサメの肉団子。選択肢はなかった。代わりもなかった。それが自然の与えるものだった。

それから私は飲んだ。赤い液体だった。ワインだと思った。濾して、煮立て、甘くしたクジラの血だった。私はそれを飲んだ。かつて感じたことのない力が湧いた。原初のエネルギー。コカインかと思った。違う。北が体の中に入ってきたのだ。

女たちは私を見ていた。老人は狩りに出かけた。私は休み、血を飲んだ。三日間、電話もインターネットもコンピューターもなく、ニーノもいなかった。ただ私と彼女たちだけ。

夜はなかった。あるのは光と、火と、氷と、息だけだった。

三人の女は横になって眠りについた。私は場所を探した。いちばん若い女が腕を上げ、もっと近くへ来るよう手招きした。三人はどっと笑い出した。私にはわからなかった。彼女たちは、私が自分たちの「クリスマス」なのだと言った。

受け入れられた、という意味の言い方だった。

感謝のしるしに少しお金を渡そうとした。彼女たちは断った。ただ抱擁がほしかった。そして、もっと身近に感じられるよう、ラブリア語で少しだけ言葉を。

そこで私は、本当の贈り物の価値を知った。買うことも売ることもできない贈り物の価値を。

ガイドとの別れ

三日後、ガイドがやって来た。彼女は三人の女と1時間話した。私は外にいた。何を話しているのかはわからなかった。私の知ることではなかった。それは彼女たちの言葉、彼女たちの世界、彼女たちの掟だった。

コンテナで私が服を脱いでいると、ガイドが入ってきた。好奇心にあふれ、率直で、北欧的だった。彼女は私を強く抱きしめた。私にキスをした。その肌はミルクのように白かった。その目は8月の空のように青かった。

彼女は、自分を連れ出してほしいと言った。あの世界から抜け出すためなら、何でもしただろう。

私は敬意をこめて微笑んだ。できなかった。すべきではなかった。

私が残したのは、ひとつの約束だけだった。「何か必要なことがあったら、手紙を書いてくれ。力になる」。彼女はお金さえ断った。美しい女だった。だが孤独だった。遠くからは見えない孤独。寒さが赦さない孤独。

帰郷

私たちはニーノを迎えに行った。彼は興奮しきっていた。帰りたくなかった。だが私には、彼の妻との約束があった。

彼はみんなに自分の三日間を語った。私は黙っていた。私は男には何ひとつ打ち明けたことがない。紙にだけだ。

そしてニーノが自分の世界へ戻っていくあいだに、私はもう別の世界へ向かっていた。別の目的地へ。別の出会いへ。

ようこそ。

エピローグ

北はあなたを奪わない。あなたを変える。そして決して

元のままのあなたを返しはしない。男たちは光を、沈黙を、写真を、夢を求めて北極へやって来る。女たちは生き延びるために留まる。

男たちは見たものを語る。女たちは生きたことについて沈黙する。

男たちは帰る。女たちは留まる。寒さの中に、雪の家に、誰にも聞かれない沈黙の中に留まる。彼女たちを讃えることのない共同体を支えるために留まる。子どもを、老人を、見知らぬ者を守るために留まる。見えないまま留まる。

私があそこから持ち帰った記憶はひとつだけだ。美しい、信じられないほど美しい、だが孤独な女。ロマンチックな意味ではない。人間的な意味で。悲劇的な意味で。

省察

北は体を殺さない。存在を殺す。そして残るのは白だ。女たちが生き、同時に消えていく場所。

だから私は書く。極限の場所は自らの物語を語らないからだ。そしてそこを旅する者には、沈黙しているという贅沢は許されない。

私は違う。私は違う。私の土地が私を生み、世界の残りは私を客としてではなく、家族の一員として迎えてくれる。

北の絶対の白から、私はアメリカ合衆国の絶対の混沌へと降りていった。

アメリカ合衆国

不可能な任務

アメリカの会社で18年働くと、世界のほかのどの会社も与えられないものが手に入る。仕事の文化、手順、明確な使命、そして理論ではなく日々の実践である価値の体系だ。彼らはそれを説明しない。あなたのために築き上げる。しかもあなたの許可を求めずに。

ニューヨークのオフィスにいたとき、想像もしなかった仕事を持ちかけられた。昇進ではない。異動でもない。実験だった。

アメリカ合衆国の内部で、人間関係のあるモデルを検証するために作られた極秘のプログラム。彼らを選んだのはマネージャーでも、心理学者でも、トレーナーでもなかった。現実の世界で、ある種の経験を積んだ人間を選んでいて。そして私の名前が挙がった。18年間ずっと営業にいたにもかかわらず。彼らが見ていたのは役職ではなかった。頭脳を見ていたのだ。

テストは説明するのは簡単で、やり遂げるのはきわめて難しかった。

1年でアメリカの50州を訪れること。都市は自分で選び、それぞれに少なくとも1週間滞在すること。

最後の2週間は強制的な休暇になる。費用はすべて彼らが持つ。私はただ生き、観察し、理解し、毎週月曜に報告書を出せばよかった。人間的で、乾いた、正確な報告を。

私は契約書に署名した。家に知らせた。家の者は何も尋ねなかった。毎月の仕送りが届いたかどうかを知りたがっただけだ。私はアメリカでの1年に立ち向かおうとしていた。彼らはいつものように、来月に立ち向かっていた。

念のため、私の給料はイタリアの銀行口座に直接振り込まれた。それは丁寧な言い方でこう告げていた。「ばかなことはするな。手持ちのもので暮らせ。おまえが本当は何者か、見せてもらおう」

15年後になってようやく、私は自分の報告書の原本、分析、そして彼らが私について集めた資料を見ることができた。この本はそこから生まれた。出版の承認は得た。ひとつの条件つきで。依頼した会社の名前を決して出さないこと。

かまわない。この物語はロゴの話ではない。自分で体験しなければ理解できない国にいる、ひとりの男の話だ。

いちばん遠い地点から始めるか？

論理的な選択は、中心ではなく周縁から始めることだった。理由は二つ、単純だ。

1. 実験を始めたばかりで、頭は冴え、注意力は最大だった。
2. 極端から始めれば、途中で針路を修正し、旅をきれいに終えることができる。

ボストンやシカゴから始める必要はなかった。境界から始めなければならなかった。書類の上でだけアメリカである場所から。

私はアラスカの州都、ジュノーを選んだ。孤立している。船か飛行機でしか行けない。誰のものでもない街。始めるには完璧な場所だった。

資源を最適化する

出発前に、私はアメリカ人が何より尊重することをした。観光客としてではなく、プロとして段取りを整えたのだ。

国内線網がいちばん大きい、最も人気のある航空会社三社に電話した。1時間もかからずに、国内線50便の回数券を60%引きで買った。

期限なし。日数の制限なし。制約なし。条件はひとつだけ。1年以内に使うこと。

ホテルチェーン、Uberタクシー、レンタカー会社とも同じことをし、それから行程の予定をきちんと組んだ。順番と手段は決めたが、日時は決めなかった。

準備はできた。

それが私の最初の本当の成功だった。動き方を知っているという最初のしるし。アメリカは待つ者ではなく、行動する者に報いる。

会社はその取引を見て、アメリカの文化がいつもすることをした。信頼性を確かめたのだ。

絶え間なく移動する1年を、私はやりくりできるのか。予想外の出来事に、距離に、緊急事態に対処できるのか。自立しているのか。

だから出発前に、もうひとつ決定的な点を片づけておいた。

クレジットカードに、毎月少なくとも10万ドルの利用限度額があるようにしたのだ。

使うためではなかった。それを管理できることを示すためだった。アメリカ人はこう考える。自律がなければ、自由はない。そして自由がなければ、評価されることもない。

その瞬間から、プログラムはもはや任務ではなかった。使命だった。

そして今、本当の旅が始まる

アラスカがアメリカ合衆国の一部なのは、地理の上でだけだ。そこは別の世界である。

女たちが跡形もなく消える場所。訴えが決して宛先に届かない場所。都市が、野蛮な大陸のただ中に浮かぶ文明の島にすぎない場所。

ジュノーは私の最初の試練だった。国のほかの地域とつながる道路が一本もない州都。アメリカらしさを感じさせないアメリカの一片。

ここで私はあることを理解しはじめた。この旅は地理の旅ではない。人間の旅になるのだと。

ブロック1 (第1巻)

アラバマ－アラスカ－アリゾナ－アーカンソー－カリフォルニア
－コロラド－コネチカット－デラウェア－フロリダ－ジョージア

ブロック2 (第2巻)

ハワイ－アイダホ－イリノイ－インディアナ－アイオワ－カンザ
ス－ケンタッキー－ルイジアナ－メイン－メリーランド

ブロック3 (第3巻)

マサチューセッツ－ミシガン－ミネソタ－ミシシッピ－ミズーリ
－モンタナ－ネブラスカ－ネバダ－ニューハンプシャー－ニュー
ジャージー－ニューメキシコ

ブロック4 (第4巻)

ニューヨーク－ワシントン

ブロック5 (第5巻)

ノースカロライナ－ノースダコタ－オハイオ－オクラホマ－オレ
ゴン－ペンシルベニア－ロードアイランド－サウスカロライナ

ブロック6 (第6巻)

サウスダコタ－テネシー－テキサス－ユタ－バーモント－バージ
ニア－ウェストバージニア－ウィスコンシン－ワイオミング ア
ラバマ アラバマは、単にアメリカ合衆国の南部というだけでは
ない。決して冷めることのない歴史の一片だ。ここでは奴隷制は
一章ではない。影である。人種隔離は記憶ではない。傷跡であ
る。信仰は慰めではない。支配である。この州では、すべてが重
い。暑さが重い。家族が重い。伝統は何よりも重い。宗教はベル
トのように喉を締めつける。共同体は観察し、裁き、覚えてい
る。本当に忘れられるものは何もない。本当に赦されるものは何
もない。そしてそのすべてのただ中に、女たちがいる。名前を呼

ばれることもなく家庭のすべてを切り盛りする女たち。三交代で働き、子どもたちの支度のために夜明けに起きる女たち。日曜には教会で祈り、月曜には黙って震える女たち。夫が仕事で疲れ果てている女たち、あるいは男が何もしない女たち。同じ一日のうちに、母となり、娘となり、祖母となり、生活の柱となる女たち。

アラバマの女の人生は、絶え間なく揺れる振り子だ。

－ 早くに家を出て結婚し、逃げ出し、急いで大人になる者がいる
－ 離婚のせいで、失った仕事のせいで、口を封じられた暴力のせいで、家に戻る者がいる

鍛えられた女たちだ。脆くはない。反逆者でもない。犠牲者でもない。

鍛えられている。

彼女たちの抵抗は静かだが、絶対だ。誰も抱き起こしてはくれないから崩れるわけにいかない者の強さである。

ダイナーのウェイトレス

コーヒーと揚げ物の匂いがした。そして私はすぐに、どこにでも当てはまるルールを思い出した。見た目が貧しい店ほど、料理はうまい。こうした真実を私は道の上で学んだ。そしてそれに裏切られたことは一度もない。

彼女の名はキャロル。

金髪——生まれつきか、たぶん違う——荒れた手、すばやい笑み、くすんだ目。誰にでも同じ疲れた優雅さで給仕していた。そして誰も本当には彼女を見ていなかった。

私は見る。働く天使を見かけると、挨拶をして微笑みかけずにはいられない。それが私にできるせめてものことだ。彼女は私をテ

ーブルへ案内した。「何を召し上がりますか？」と彼女は尋ねた。イタリアだったら、私は自分の本音を言っただろう。それでも言ってみた。

「あなたが欲しい」

彼女はぽかんと私を見た。あるいはわからないふりをしたのか——すべてわかっているときに限って何もわからなかったと言う、ある土地の人々のように。繰り返しても無駄だった。そこで私は注文した。

ホットドッグ。ビール。そしてデザートと一緒に、ブラックのアメリカンコーヒー。

私は彼女の好奇心をかき立てていた。その動きを見ればわかった。数分後に彼女は戻ってきた。「あと10分でシフトが終わるの……座ってもいい？」

私はうなずいた。

彼女は背中を丸めて座った。決して休むことのない人のように。私の目をまっすぐ見て、芝居がかったところもなく言った。

「この仕事をするしかないの。夫はイラクで死んだ。子どもも、身寄りもない。それに街角は……わたしにできる仕事じゃない」

私は答えなかった。ときに言葉は侮辱になる。私は彼女の手を取った。しっかりと握った。乾いた、清潔なしぐさ。

そして彼女の手のひらに、私は100ドルを残した。

私は立ち上がった。店を出た。振り返らずに。だがガラス越しに彼女が見えた。驚いたように、傷ついたように、感謝したように、はじかれたように立ち上がっていた。言葉にならない何かを口ごもっていた。

そしてそこで私は、キャロルの人生の真実を理解した。

彼女は決して座らない。

ゴスペル歌手

いつもと変わらない日曜日だった。私は自分の霊的な部分に触れたくなった。アラバマでそれは教会に行くことを意味する。あそこでは、信仰は宗教ではない。舞台である。

私が正面の扉から入ったとき、牧師は説教を終えようとしていた。扉は暑さのせいで大きく開け放たれていた。脇の入口は選ばなかった。あの小さな共同体に、私の到着を気づいてほしかったのだ。

牧師は私を見て、大きな声で言った。「ようこそ、旅の方」。私は答えた。「あなたにも、ようこそ」

私は腰を下ろした。オルガンが震えはじめた。高く、聞き慣れた音。誰も有名でないときでさえアレサ・フランクリンを思い出させる、あの「アメリカの亡霊」。そして彼女が入ってきた。

その声は歌っているのではなかった。解き放たれていた。

アフリカ系アメリカ人の女だった。人目につかずに通り過ぎる類いの人ではない。人生に押しつぶされたとき人間に何ができるかを思い出させるために、運命がたった一度だけ目の前に置く類いの人だ。その声は巨大だった。その人生は小さかった。彼女は息をするために日曜に歌い、生き延びるために一週間黙っていた。

終わると、人々は何事もなかったかのように立ち上がって帰っていった。私は近づいた。彼女は驚いた。あそこでゴスペル歌手に礼を言う者はいなかったのだ。空気に礼を言うようなものだ。誰もがそれを当たり前だと思っている。

私は彼女の手を握った。小さな器を差し出した。高貴な女のためにとっておかれるような器を。彼女はすべてを、あるいはほとんど

どすべてを持っていたからだ。足りないのは私だけだった。そして1分のあいだ、私はそこにいた。

「あなたは誰？」と彼女は尋ねた。私は答えた。「あなたのためにだけに天井から降りてきた天使のひとりです。そしてあなたのおかげで、今日、私は人間のままでいられる。もう決して戻りません」

彼女は微笑んだ。いいしるしだ。私は何も売っていなかった。何も求めていなかった。吸収していた。いつものように。

彼女の好奇心はいまにも問いとなって弾けそうだったが、私はもう出口へ向かっていた。そしてそれは起きた。

彼女の声が私を呼んだ。「旦那さん！　旦那さん！　旅の方！」。大きな叫び。空気に満ち、痛みではない何かに満ちた叫び。

私は振り返らなかった。助けを求める叫びと「なぜ」の叫びは聞き分けられる。あれは「なぜ」だった。そして答えは必要なかった。私の捧げ物は彼女の足もとに残った。それが私のしるしだった。誰も一度も拍手を送ったことのない残りの人生について、彼女は書くだろう。

女子学生

彼女は本と、目立たない差別のあいだで暮らしていた。私はキャンパスの外に座り、そこで教授になったかつての同僚の女を待っていた。キャンパスは走りまわり、笑い、見られていないふりをする若者でいっぱいだった。彼女は違った。彼女は見ていた。

かつての同僚が着くと、彼女は私を強く抱きしめた。学生はその場面を見ていた。目をそらさなかった。そして私は抱擁を返ししながら、彼女を見ていた。彼女だけを。

教授はほかの用事に急がなければならなかった。短い別れの言葉と懐かしそうな様子を残して、私を中庭の真ん中に置いていっ

た。私は噴水の縁へ行き、学生の隣に座った。彼女は微笑んだ。誘いでもなく、防御でもない、あの種の微笑み。真実そのものの微笑みだった。

「君の夢は何？」と私は尋ねた。「若くて、頭がよくて……とんでもなくきれいだ」

彼女は顔を赤らめなかった。得意げにもならなかった。現実とともに生きることを覚えた人のように、短く答えた。

「南部から逃げ出すのが夢なの。」

でも、南部はどこまでもついてくる」

私はうなずいた。「私がどこの出身か知ってる？」。彼女は首を横に振った。「南イタリアだ」。一瞬、間があった。それから笑った。短い笑い。重さの中に窓を開けるような笑いだった。

私たちはほとんど話さなかった。だがそれで十分だった。

「私たちはアイデンティティと、過去と、期待と闘うために生まれてきた」と私は彼女に言った。「いつも他人に変わってくれと求める。でも本当の変化は自分の内側から始まるんだ」

若かった。だが背負っている重さは若くなかった。そしてそれを、尊厳をもって背負っていた。

立ち去る前に、演説でも約束でもない何かを残したかった。ただ真実だけを。

「覚えておいて、お嬢さん：

北にとっての南は、男にとっての女と同じなんだ」

彼女は私を見た。わかってくれた。ほかには何もいらなかった。

私は立ち上がった。「さようなら。幸運を」

彼女は答えなかった。ただ微笑んだ。そしてその微笑みには、キャンパス全体よりも多くの未来があった。

現代のプランテーションの女

私は州商工会議所の会頭と会う約束があった。以前イタリアで議員を務めていたので、ある種の制度の力学は、ふたたび目にしたとたんに頭によみがえる。彼は背が高く、痩せていて、上品だった。金の腕時計。古い富のほのかな香り。見せびらかす類いのものではない。身にまとう類いのものだ。この金持ちは金の匂いがしないからだ。すべての匂いがする。

彼は自分の州を誇りにしていた。誇りすぎていた。アラバマの経済が国全体を支えていると信じ込み、それを証明しようと、私を綿のプランテーションへ連れていくことにした。まず土地。次に加工。それから現代の農業産業。鎖は外したが、同じリズムを残した産業だ。

そしてそこで、私は彼女を見た。

太陽が彼女の背中を焼いていた。その動きはひどくゆっくりで、正確で、ひとつの不平もなかった。成熟した大人の盛りにある女で、疲労に彫り刻まれたような顔をしていた。家族を肩に背負っていた。肌には皺が刻まれていた。目は硬かった。決して、一度も、過ちを自分に許さない者の歩調だった。

私は会頭に、労働者と話してもいいかと尋ねた。「よりよく理解したい」のだと言った。口実だった。私はただ彼女と話したかった。

私は近づいた。彼女はひざまずき、私の手に口づけした。古い、場違いな、時代外れのしぐさ。私はすぐにやめさせた。

「立ってください」と私は言った。「私は司教じゃない。教皇でもない。あなたと同じ、ただの人間です」

答えはなかった。本当に見ることを許されない者がそうするように、ほとんど私を見なかった。私は数秒黙っていた。それから立ち去った。だが、それで終わりではなかった。

翌日、私はひとりで戻った。まわりを取り巻く政治の芝居なしに、もう一度彼女に会いたかった。

労働者たちが出てくるのを待った。私を見ると、彼女は目を伏せた。内気さ。敬意。そして抑えこまれた、話したいという思い。

私は何も押しつけず、ゆっくりとした身振りで彼女を引きとめた。彼女は南部の隠された連続性の顔だった。決して消されたことのない古い労苦。ただ、よりうまく隠されただけの。

私は彼女の手を取った。いつも持ち歩いているピオ神父の小さな写真を渡した。その裏に、私はこう書いていた。

「痛みは、過ぎ去れば忘れられるものではない。

赦したときに、はじめて忘れられる」

私はそれ以上何も言わなかった。必要なかった。彼女は、ほかの者には見えない小さなしぐさでうなずいた。だが私にとって、それがすべてだった。

エピローグ－アラバマ

アラバマは州ではない。審判である。過去が過ぎ去らず、現在が許可を求めない場所。すべてはいまも二行で書かれている。立っている者と、倒れる者。そして、立っているのはいつも女だ。

私は四つの違う顔を、だが同じ真実を見た。決して座らないウェイトレス、息をするために歌うゴスペル歌手、つきまとう南部から逃げ出すことを夢見る学生、古い労苦を受け継ぐ新しいプランテーションの労働者。四つの物語。同じ根。同じ静かな闘い。

アラバマで女は、守りもすれば罰しもある信仰の中に、支えもすれば息を詰まらせもある家族の中に、観察し裁く共同体の中に生きている。それでも彼女は抵抗する。屈しない。折れない。言い訳をしない。

男たちは自分たちの南部を誇りの源として語る。女たちはそれを試練として生きる。

省察 – アラバマ

真実は単純だ。男が名を掲げるところで、女が世界を支配している。

アラバマは私に教えた。叫ぶために声を必要としない人生がある、と。必要なのは、耳を傾けてくれる誰かだ。そして私はまたしても、自分にできることをした。通り過ぎ、観察し、理解し、そして邪魔をせずに去る。

なぜならアメリカ南部には、グローバル・サウスと同じように、何世紀も変わらぬ掟があるからだ。そこに生きる者は変わらない。彼らを見た者が変わる。

私は見た。そして私は、同じままではない。

アラスカ

アラスカは州ではない。生きている辺境だ。大陸ほどの広さの土地で、人間は客であり、決めるのは自然だ。空路でしかつながない町がある。医者が月に一度しか来ない村がある。電気が贅沢で、お湯が特権である家がある。ここでは寒さは気候ではない。ひとりの登場人物だ。人を形づくり、習慣を鑄造し、沈黙を課す。生活は不可能な距離と、きつい労働と、深く食い込む孤立でできていて、それが話し方も、愛し方も、生き延び方も変えてしまう。

先住民の共同体は何世紀もの伝統を背負っている。女たちは礎だ。家を守り、子どもを育て、共同体をひとつにまとめる。だが声ではない。耐えていることを分かち合う場さえ、しばしば持たない。

町では — アンカレッジ、フェアバンクス、ジュノー — 世界は速く動くが、孤独は同じままだ。女たちは仕事を、自由を、未来を求めてやって来る。多くは郊外に、石油会社のシフトに、悪い関係に、役所の沈黙に呑み込まれて終わる。

アラスカでは、女が倒れても、その音はどこにも届かない。寒さがすべてを覆う。そして消えたものは、消えたままだ。

タクシー運転手の女

空港からホテルまでの道のりで十分だった。凍った道を45分、40歳の未亡人は一秒たりとも私に話しかけるのをやめなかった。アラスカではいつもこうだ。人はひとりで暮らしているが、耳を傾けてくれる誰かに出会うと、まるで最後の日であるかのように心を開く。

私はこの旅のあいだずっと作家でいようと決めていた。役職も、会社も、試験もなし。私は匿名のままでいた。本当のところ、自分が何を探しているのか私自身もよくわかっていなかったからだ。ただ、誰かが私に金を払って、彼らが口にしない何かを理解させようとしていることだけはわかっていた。彼女はお決まりの質問から始めた。年齢、仕事、結婚しているか、子どもはいるか。私はただ答えた。「婚約しています」

彼女は吹き出した。そしてアラスカでは、笑いが女の信頼へのパスポートだ。その瞬間、私は彼女の世界の内側にいた。

ホテルに着いた。彼女は車を止め、口実を見つけて私のスーツケースを持って部屋まで送ってきた。私はすぐにひとつのことを理解した。女は何かを欲しいとき、頼まない。取るのだ。

それが、用心しなければならない最初のしりしだった。危険だったのではない。礼儀だったのだ。アラスカで夜ひとりで車を走らせる女は、誰よりも男を読むことを覚えていなければ、40歳まで生き延びられない。

私たちは友人のままでいた。今でも連絡を取り合っている。彼女は助言を求め、そのたびに同じ言葉を繰り返す。

「あなたはみんなの問題の答えを持っているのに、自分の問題はひとつもない。あるのはチャンスだけ」

生き延びるために凍える寒さのなかを走る女。そして、誰かが彼女を理解した以上に、ずっと他人を理解し続けてきた女。

国境警備の女性警官

朝、散歩に出た。旅をするとき、私はいつも同じことをする。身分証と財布はホテルに置き、ホテルの名刺だけを持って出る。もう何年も続けている習慣だ。家々を、寒さを、アラスカの沈黙を眺めていると、前触れもなくパトカーが2台やって来た。女性警官が二人飛び出し、車を止め、黄色いテープを張り、まるで殺人事件が起きたばかりのように一帯を封鎖した。

私は立ち止まって見ていたが、数秒後、そのうちの一人が私にその場を動くなと命じた。目撃者として事情を聴きたいというのだ。

何の目撃者だ？

私は何も見ていなかった。ただ散歩していた男にすぎない。

「事件」とはこうだ。一匹の犬が窒息死した。誰かが水も与えずにホットドッグを食べさせたのだ。アラスカでは、これも犯罪になる。

その瞬間、私は映画のセットに迷い込んだのだと思った。だが現実だった。アラスカだった。そして私はそこにいた。

彼女たちは私をパトカーに寄せ、身分証を取りにホテルまで送ってくれた。二人のうちの一人は上手なフランス語を話し、それで私に質問を始めた。

犬は死んでいた。犯人を見つけなければならない。私はそこにいた。だから取り調べを受ける身だった。

私は動物が好きだと言った。イタリアに二匹いる、と。そしてそれだけで、あの説明のつかない北米の論理では、私を「容疑者ではない」と見なすのに十分だった。

緊張はほどけた。形式は蒸発した。そして夕食の誘いが届いた。

制服を脱いだその女性警官には、氷のただなかでは思いもよらない炎があった。メキシコ女やスペイン女についての固定観念は忘れていい。アラスカの女が熱いのは、遊びのためではなく、生き延びるためだ。

夕食は簡素で、率直で、気取りがなかった。私の冗談に、彼女はもう何年も笑っていなかったかのように笑った。こんな辺鄙な土地では、笑いは希少品だ。

最後に、約束も期待もなく別れを告げた。残ったのはただひとつ、強く鋭いものだった。

沈黙。

アラスカでは、どの物語のあとにも必ずやって来る沈黙だ。そしてそれは氷よりも重い。

大学の娘

ホテルで図書館の場所を尋ねていた。私にとって、そこはいつも理想の場所だった。内には沈黙、外には言葉。人々が静けさを身

にまとい、扉を出たとたんに元の自分に戻る場所。

私はすぐにエルガ — 司書の秘書 — に気づいた。赤い縁のモダンな眼鏡をかけていた。北の女がつけると、スタイルと、性格と、自然な官能を伝える細部だ。私はコーヒープレイクに誘った。彼女は二度考えなかった。図書館に鍵をかけ、私たちは出かけた。

バス停に着いたが、私たちのバスはほんの数分前に出てしまっていた。つながらなかった電話。乗り損ねた列車。チャンスに変わる、あの小さな裂け目のひとつだ。

彼女はめげなかった。何年も前から知っているかのように私の腕を取り、自分の家へ連れて行った。イングリッシュティーとビスケットを出してくれた。素朴で、ほとんど子どもじみたもてなしだった。私はたまたまそこに居合わせたイタリア人で、彼女は未来のひとかけらを探している若い大学生だった。その小さく整った居間で、私はひとつのことを理解した。アラスカでは、親切は短い仕草だ。即座の行為だ。形式ではない。必要なのだ。

彼女は夫を探していた。口には出さなかったが、そのすべての仕草に表れていた。私は自分に本当にできる唯一のことをした。助言を与えたのだ。彼女の手を握るべきなのは私ではなかった。私は与えるために生まれてきたのであって、奪うためではない。そしてそれは私の時ではなかった。

3年後、一通のメールが届いた。一枚の写真。子どもを抱いた彼女。そしてたった一文。

「この子にあなたの名前をつけたの。」

愛からじゃない。敬意から」

霜がすべてを覆う国では、ときに小さな仕草ひとつで、決して溶けない跡を残すのに十分なのだ。

主婦

私は自分がダイエットを投げ出しかけていることに気づいた。一日一食は旅のあいだなら構わないが、寒さが断りもなく体を蝕むアラスカのような場所ではそうはいかない。私はレストランを出て市場へ行くことにした。いちばん理にかなった選択だった。きちんと食べ、地元の人々をもっとよく観察できる。

地方のスーパーマーケットでは、すべてがわかる。どんな服を着ているか、いくら使うか、子どもをどう見るか、疲れとどう付き合っているか。それはその町でいちばん正直なショーウィンドウだ。

イタリアの生ハムの袋と水牛のモッツァレラ — あの凍える寒さのなかでは珍しい贅沢 — を手に取ったとき、満杯のショッピングカートが私の脇腹にぶつかってきた。とっさに、偶然だと思った。だが私の経験では、女は何ひとつ「偶然」にはしない。自分がどこへ向かっているか、いつもわかっている。

彼女は私を見て言った。「生ハムとモッツァレラ……あなた、イタリア人でしょ？」彼女は一瞬ですべてをつかんでいた。国籍も、好みも、買い物の品のよさまでも。

彼女の名はローズ、56歳。

娘と、娘婿と、二人の孫と暮らしていた。彼らは彼女の喜びであり、重荷だった。家を沈まないように支えていて、誰もそれに気づかない、そういう女だった。

私は近くのカフェでコーヒーをと誘った。彼女はためらわずに応じた。買い物を済ませ、車に積み、私のところへ車で戻ってきた。

テーブルに着くと、彼女は話し始めた。たくさん。私は聞いた。遮らなかった。ときに最も強い言葉は、相手に使わせてやる沈黙だ。

ある瞬間、彼女は微笑んで言った。「イタリア人、愛、マンマ、ピザ、スパゲッティ……」固定観念でできたお決まりの言葉だったが、本物の優しさがこもっていた。私の本を一冊でも読んだのだろうか、と思った。

それから彼女は言った。自分は作家なのだ、と。そして私がペンネームで出した本を一冊買っていた。幸いにも、私だとは気づいていなかった。

彼女は自分の暮らしについて話し続けた。人でいっぱいの家、同じことの繰り返しの日々、孫たちに何ひとつ不自由させたくないという不安、当たり前に見えるせいで口にできない愛。

ようやく話し終わると、彼女は私の目を見た。千の言葉より多くを語る、あの眼差しのひとつだった。

私はただこう言った。「明日、あなたの本を買います」そして書評を送ります」

彼女は胸を打たれた。声がかすかに震えていた。「ありがとう。あなたに会えてどんな気持ちになったか、あなたにはわからないでしょうね。なんて上品で、礼儀正しい人……イタリア人はみんなそうなの？」

私はいつも答えるように答えた。「手と足を見てください。その人が本当はどこから来たのか、そこでわかります」

ローズは微笑んだ。見えない女が、ひとつの午後のあいだだけ、見えない女であることをやめた微笑みだった。

エピローグ – アラスカ

アラスカはあなたを迎え入れもしないし、拒みもしない。観察する。測る。あなたがもう一日留まるほど正直か、それとも去るほど正気かがわかるまで、あなたを宙づりにしておく。

この州では、距離は地理ではない。人間だ。人々は、よそなら数秒で終わるのにここでは何か月にもなる沈黙のなかで生きている。孤独は彼らの母語だ。そしてそれをいちばん上手に話すのは女たちだ。私は四つの異なる役割の四人の女を見た。そして全員にひとつの共通点があった。誰も、誰かを待ってはいなかった。

タクシー運転手は、止まらないために走っていた。女性警官は、制御できない世界を制御していた。大学生は、現在を奪う場所で未来を探していた。主婦は、誰にも見られずに一軒の家をまるごと支えていた。

アラスカでは、女は頼まない。行動する。

そこは、人生は短く、夜は長く、真実が観客を必要としない場所だ。

省察 – アラスカ

アラスカは私に、単純で獰猛なことを教えた。世界は男と女に分かれているのではない。重荷を背負う者と、それを他人に背負わせる者に分かれている。

この州では、背負っているのは彼女たちだ。

私が見たのは脆さではなかった。尊厳だった。平和から生まれるのではなく、嵐に慣れることから生まれる静けさを見た。不平を言わない女たちを見た。言ったところで誰も聞かないと知っているからだ。

アラスカの女たちが見えないのは、いないからではない。本当に見えるほど長く、誰も彼女たちを見つめないからだ。

彼女たちは時間のない母親であり、勤務時間のない働き手であり、観客のいない守り手だ。拍手を求めない社会の一部だ。そしてこれからも決して求めない。

アラスカの女たちは自分の経験を語らない。だから今、私が語っている。

アリゾナ

アリゾナは砂漠に開いた傷口だ。埃と、峡谷と、冒涇はせずただ裁く沈黙の広がり。ここでは太陽は暖かくない。焼く。そして夜は涼しくない。分断する。

ここは国境の州で、どの道も疑いを運んでいる。移民、国境警備隊員、先住民の部族、退役軍人、トラック運転手、独り身の女たち、壊れた家族。そのすべてが容赦のない熱のなかで混ざり合っている。

町は近代的に見えるが、その外周を一步出たとたんに真実を感じる。アリゾナは砂漠であり、過疎であり、麻薬であり、文化同士の衝突であり、決して絶えることのない先住民の根であり、地平線のない孤独だ。

では女たちは？ここで彼女たちは嵐の目のなかで生きている。国境とアイデンティティのあいだで、生存と誇りのあいだで、暴力と自由のあいだで。

アリゾナの女は何者にでもなりうる。－ホピ族やナバホ族の先住民－メキシコからの移民－ゴーストタウンのシングルマザー－国境警備隊の警官－居留地の看護師－逃げ出すことを夢見るフェニックスの学生。

だがどの役割にも、同じ重荷がある。止まることもできずに耐え抜くこと。

国境警備の女性警官、38歳

警察との遭遇は、世界のどこであれ、いつも自分のいる社会を試すテストだ。私はそれをいつも、その土地との、その規則との、

その限界との、その亡霊との直接の対決として経験してきた。

その午後、私は自由に、気ままに動けるよう車を借りていた。道は自分のものだと思い込んでいた。だがアメリカでは、道は決してあなたのものではない。あなたに借りがあるのだ。

私は4時間、休まずに走った。それから5時間。アリゾナの砂漠は容赦がない。果てしない峡谷、身震いするような沈黙、どれも同じに見える何マイルもの道。

そしてそれが見えた。回転灯を光らせたパトカー。停止の命令。

一人の女が降りてきた。はっきりとメキシコ系の顔立ち、強い黒い瞳、後ろにまとめた黒髪、赤い唇。黒いレイバン、そして砂漠そのものから彫り出されたような体。考えもせずに、私は言った。

「ミスコンテストから逃げてきたんですか？」

彼女は誰にも触れさせなかった。「ふざけないで。書類を出しなさい。でないと逮捕するわよ」

実に冷静。致命的。プロフェッショナル。

私はすべてを彼女に渡した。お決まりの質問。なぜこんなに国境の近くにいいのか、どこから来たのか、なぜ何時間もまっすぐ走っていたのか。「キノコ狩りをしているとは言えませんからね」と私は答えた。「本当のアメリカが見たいんです。本には載っていないアメリカが」彼女は私を車から降ろした。すべてを調べた。それから私をじっと観察した。「どうして酒を持っていないの？ どうして煙草を吸わないの？」「元ラグビー選手でしてね。悪癖はひとつしか残っていないんです」「食べ物？」と彼女は言った。「私が欲しいものは食べられません。愛することしかできない」「犬？」と彼女は笑った。「いいえ」彼女は身をこわばらせた。私が行き過ぎてしていると気づいたのだ。そこは危険な領域だった。彼女には権力があり、権威があり、そのうえ許可を求めない気性まであっ

た。「愛することしかできないものが何か、わかるの？」と彼女は尋ねた。「もちろん。すべてが始まったもの、私たちをつくったもの、私たちを生かしているもの、私たちを前へ運ぶもの」「誰？」
「女です。わかりませんでしたか？」彼女は答えなかった。書類を返してよこした。「引き返しなさい。ここはあなたの道じゃない」私は従った。それがいちばん賢いことだった。それから夜が来た。

そして夜の10時、ホテルのロビーで、彼女が入ってくるのが見えた。私服。同じ眼差し。同じ強さ。自分が何を欲しいのか正確にわかっている女。

彼女は近づいてきた。「一杯もらえる？」

「いいえ」と私は答えた。そして立ち上がった。

彼女は私の腕をつかんだ。「どうして行っちゃうの？」

私は彼女の目を見て、真実を告げた。

「危険から逃げるのは臆病じゃない。常識だ」

そして私は立ち去った。

ナバホの女

その朝、私は寝坊した。そのあとキャンパスで、ゲストスピーカーとして話すことになっていた。仕事鞆をつかみ、駐車場へ降り、「Campus」と書かれた最初のバスに乗った。単純で、間抜けで、無邪気な間違いだった。

1時間たっても、見覚えのあるものは何ひとつなかった。違う道、違う景色、そして誰も降りない。やがてバスが止まった。終点。

ナバホ居留地。

次のバスは翌日の出発だった。電話もなく、連絡手段もなく、同僚に知らせる方法もない。翌日顔を出して、行き違いを説明するしかなかった。そういうこともある。人生は前もって知らせてはくれない。

居留地に入るやいなや、族長が、何年ぶりに帰ってきた親戚のように私を抱きしめた。妻と娘と近しい親族を紹介してくれた。あちこちを案内し、飲み物を勧め、さりげなく言った。

「今日の午後、あんたのために宴を開くよ」

彼らは別の誰かを待っていたのだ。私は偶然そこに行き着いたのだろう。あるいは、運命はときに間違いのふりをしてやって来る。私は微笑んだ。受け入れた。砂漠に決めさせた。

バッファローの肉。血のケーキ。ジャガイモ、ピーマン、玉ねぎ。歯止めのないビールと酒。どこを見ても伝統衣装。火が燃えていた。ゆっくりした太鼓。そして族長の娘が、白い羽根のついた帽子を私にかぶせた。

彼女は本物のナバホだった。無口。注意深い。すべてを見て何も言わないことに慣れている。伝統と、労働と、誰も通報しない家庭の傷と、コンクリートの下でさえ死なないアイデンティティのなかで育つ、そういう女のひとりだった。

宴は夜更けまで続いた。ジョン・ウェインの映画で見た場面だったが、逆さまだった。彼らは攻める側ではなかった。生き残った側だった。

彼らは私を族長のティピーで、バッファローの毛皮の上に寝かせた。服はなし。古い儀式だ。私は受け入れた。私を迎え入れてくれた世界に逆らうためにそこにいたのではない。しばらくして、族長の娘が入ってきた。同じ格好。言葉はない。ただ、そこにいること。

それから族長とその妻がやって来た。それぞれ自分の毛皮をまとい、それぞれ自分の位置に。娘の様子を確かめた。そして私の様子も確かめた。満足げに。穏やかに。すべてがあるべき場所にあるかのように。

翌朝、私はトイレを探した。彼女は葦の茂みと川を指さした。

川で体を洗おうとしたが、水は濁っていて魚だらけだった。私は葦の茂みに入った。そこは空いているように見えた。

間違いだった。

私が落ち着いたとたん、二人のインディアンが、それが世界でいちばん当たり前のことであるかのように、新聞を手にして出てきた。それから三人目。それからまた一人。

村じゅうが同じ葦原で糞をしていたのだ。

そして私は、自分ひとりだと思っていた。

文明へ戻るバスがもうすぐ出るところだった。乗り遅れるわけにはいかなかった。

族長の娘が私を引き止めた。その目には迷いがあった。「また会える？」

私はノートパソコンを彼女に渡した。連絡を取り合うための手段。ひとつのチャンス。

だが、その連絡は一度も来なかった。

なぜならインディアンの沈黙は不在ではないからだ。それは歴史だ。掟だ。確認を求めない記憶だ。

ゴーストタウンの看護師 – 45歳

甲状腺の調子がおかしくなり始めていた。食べていないのに、太っていく。よくある話だ。

薬局を試した。処方箋がなければ薬はない。スーパーマーケットを試した。市販薬はない。残る選択肢は病院だけだった。

そしてそこで、彼女に出会った。

コンチータ。

看護師。45歳。アリゾナの見捨てられた地域に住んでいた。そこでは暑さが呪いのようにのしかかり、夜は過剰摂取と、遠いサイレンと、空き家で満ちている。ゴーストタウンでは、人は生きたままでも消えていく。

彼女は私を見た。毎日、絶望した人々、麻薬中毒者、けが人、壊れた家族を見ていた。私のような者 — 外国人で、スーツを着て、礼儀正しく、甲状腺の薬のためだけにここにいる者 — は、緊急の問題のリストには載っていなかった。

それでも手続きは越えられない壁だった。オバマケアは確かに全員に医療を提供していたが、入院していればの話だった。

私は入院すべきではなかった。ただ生き続ければよかった。

私は食い下がらなかった。その必要はなかった。ただ、近くのホテルに泊まっていると伝えただけだ。名前を残した。フェルディナンド。それ以外は何も。

私は立ち去った。その夜、真夜中ごろ、ホテルの電話が鳴った。フロント係が、ご婦人を部屋に上げてよいか、それともロビーに降りてくるほうがよいかと尋ねてきた。

私は降りることにした。

コンチータがそこにいた。私服で。制服もなく、役割もなく。

「話せる？」と彼女は尋ねた。私はうなずいた。

私たちは近くのパブへ行った。向かい合って座ると、彼女はテーブルの下に手を伸ばし、小さな白い封筒を私に渡した。中には私

の薬。彼女はそれを、中毒者に麻薬を渡すように渡した。同じ用心深さで、同じ危険を冒して、同じ秘密のうちに。

なぜ彼女がそうしたのか、私にはわからなかった。私は何も頼んでいなかった。

わかったのは、彼女が口を開いたときだった。

「薬のことじゃないの」と彼女は言った。「あなたの頼み方よ。物腰。礼儀。スタイル」

彼女は私の目を見た。叫びと、緊急事態と、暴力と、貧困のなかで日々を過ごす女は、奪おうとするのではなく、ただ生きたいだけの者をすぐに見分ける。

「誰にでもするわけじゃないのよ」と彼女は付け加えた。そして私はそれを知っていた。

不在に満ちた砂漠のさなかで、ひとりの見えない女が、そこにいることを決めたのだ。

トゥーソンのウェイトレス – 22歳の移民

午後、甘いものが無性に欲しくなった。空腹ではなかった。愛情の欠乏で、私はそれをわかっていて。いちばん簡単な治療法は、レストランに座って何か甘いものを頼むことだった。

ウェイトレスはすぐに来た。小柄で、ほっそりして、体はか弱いが動きは素早い。スカートをはいたスピーディー・ゴンザレスの妹のようだった。足首に火がついているかのように、テーブルのあいだをすり抜けていった。

「いくつ？」と私は尋ねた。

彼女は伝票にさえ目を落とさなかった。私をにらみつけた。

「あんたに関係ある？ 食べて、払って、出ていきな。しつこくしたら警察を呼ぶからね」

体は22キロ。気性は20トン。ガラス瓶に詰めた純粋なダイナマイト。

店主がすぐに出てきて謝った。一部始終を見ていたのだ。私は何も悪いことはしていなかったが、彼女は分析するタイプではなかった。反応するのだ。

店主は彼女の身の上を話してくれた。何も持たずにメキシコからやって来た。金もなく、家族もなく、確かな書類もなく、何の保証もなく。生き延びるためにテーブルに給仕し、アリゾナがめったに与えない未来を望んでいた。

彼女は急いでいた。世界じゅうの急ぎを抱えていた。そしてその急ぎこそが、彼女の限界だった。

私はペンと紙を頼んだ。手紙を書いた。ロマンもなく、幻想もなく、ただ真実だけを。店主に託して彼女に渡してもらった。店主は、敬意を示す相手にするようにうなずいた。

翌日、私はその店の前を通った。中には入らなかった。ただ観察したかった。

突然、背後に素早い足音が聞こえた。背中に一撃。

私は振り返った。

彼女だった。

こわばった顔、落ち着かない目、荒い息。

「22歳よ」と彼女は言った。

「で、あんたいったいどこで寝てんのよ？一晩じゅう探したんだから。警察だってあんたの居場所を知らないじゃない」

私は彼女を見た。前の晩と同じ娘だったが、鎧がなかった。大人を食い尽くす世界のなかの、ひとりの子ども。

私は彼女に別れを告げた。そして去った。無関心からではない。敬意からだ。触れてはならない脆さというものがある。手放してやらなければならない。

エピローグ – アリゾナ

アリゾナは風景ではない。国境だ。そして国境は越えるものではない。向き合うものだ。

この州では、暑さは温度ではない。裁きだ。砂漠は空間ではない。孤独だ。人々は生きているのではない。耐えている。

私は四人の女に出会い、全員が同じ言葉を持っていた。生存。国境警備の女性警官は、完全武装していながら、彼女が巡回する砂漠と同じくらい孤独だった。ナバホの女は、容赦のない土地と、決して癒えない記憶の娘だった。ゴーストタウンの看護師は、人目につかずに命を癒やし、もう何も残っていない者を救っていた。移民のウェイトレスは、22年分の怒りと脆さで、自分より大きな世界と戦っていた。

四つの異なる道。内側には同じ砂漠。

アリゾナでは、女は未来を待たない。全力でそれを探す。そして見つからなくても、歩き続ける。止まることは消えることだからだ。

男たちは峡谷を見るためにこの州を横切る。女たちは死を避けるためにここを横切る。そして黙って、誰にも何も頼まずに、それをやったのける。

省察 – アリゾナ

砂漠はひとつのことを教える。誰もひとりでは生き延びられない。

それなのに、それをやっているのはアリゾナの女たちだ。毎日。毎晩。息をのむような気候と、強くいられないときでさえ強くあれと求める社会のなかで。

彼女たちは嘆く時間のない女たちだ。夢見る時間もない。間違える時間もない。

そして私はまたしても、いつもしていることをした。彼女たちに出会い、観察し、耳を傾け、そして行かせた。敬意とは、引き止めないことから生まれるからだ。アリゾナは私に思い出させた。理解されることを求めない人生がある、と。ただ無視されないことだけを求めている。

そして私は彼女たちを無視しない。決して。

アーカンソー

アーカンソーは、丘と川ときしむ木の家々のあいだのゆるやかなカーブだ。音を立てない州だ。音を立てれば、望まない注目を引いてしまうからだ。ここではすべてが骨まで削ぎ落とされている。農作業、忘れられた鉱山、孤立した共同体、貧困がひとつの段階ではなく遺産である界限。

それは地図の外で生きているアメリカだ。富は西にある。近代は北にある。ここに残っているのは、ほかに選択肢のなかった者たちだ。

アーカンソーの女たちは、残ったものをつなぎとめている者たちだ。不安定な家族、崩れかけた家、不在か働きすぎの夫。アーカンソーの女は早く大人になり、早く結婚し、早く老いる。

彼女は－フルタイムの母親－資格のない看護師－即席の心理カウンセラー－料理人、運転手、教育者－スーパーマーケットで、農場で、格安クリニックで働く薄給の労働者だ。

だがそれで終わりではない。アーカンソーにはもうひとつの顔もある。厳しく、隠れた、力を与えながら人生を奪う仕事でできた顔だ。彼女はまた－町じゅうの秘密を知っている郵便局員－ボーンナスも栄光もなく、ストレスだけを抱える地元企業の管理職－恐れられながら無視され、書類の山と安月給に押しつぶされる税務・歳入の職員－罰として、あるいは保護のためにここへ異動させられ、沈黙を強いられたFBI捜査官－自分の名前さえ知らない共同体に水を保証する水道局の技術者－治療を約束しながら過酷なシフトを差し出す製薬会社の労働者

信仰は錨だ。苦労は日常だ。孤独は当たり前だ。

ここで女たちが求めているのは解放ではない。ひと息つくことだ。そしてたいていは、それさえ見つからない。

郵便局員－48歳

アーカンソーでは、郵便局は町の中心にある。手紙や小包が通るだけの場所ではない。噂話、小切手、苦情、詐欺、告白がそこを行き交う。

彼女がそれを沈まないように支えている。彼女は誰についてもすべてを知っている。だが誰も彼女について何も知らない。

私にとって、それは母の職場に戻ったようなものだった。郵便局で35年。ある種の力学はすぐにそれとわかる。硬直した上下関係、ごく一部の者にだけ置かれた信頼、手から手へ渡りながらも常に管理されている金。私は、どんな反応が返ってくるかももうわかったうえで中に入った。予測できることは有利だ。

48歳の局長クリスが自分の執務室の扉を開けたのは、ひとつの冗談がきっかけだった。彼女はすぐに私を「外国人コンサルタント」として扱った。誰も信用しないことに慣れていながら、何もかもひとりでやることに疲れた女が持つ、不信の混じったあの好奇心で。

まず、彼女は自分に何ができるかを見せた。それから、もっと勇気を出して、何を望んでいるかを。

最初の壁を越えると、金と日々の道具に触れることで残りが溶けていった。彼女は話し始めた。管理部門との難しい関係、キャリアの行き詰まり、破られた約束、絶え間ない監査、ゼロの評価。

「早くて効果のある解決策が必要な」と彼女は言った。

私はただ、挑発として投げかけるようにラテン語の言葉を口にした。「Do ut des」 与えるから、与えてくれ。

彼女はすぐに理解した。「助けてくれるなら、欲しいものは何でもあげる」

3日かけて、私は本部宛ての一連の手紙を用意した。彼女はそれを読み、副署し、送った。ほどなくして、呼び出しが来た。

彼女はコンサルタントとして私に同行するよう求めた。私は承知した。結果ははっきりしていた。－職員から管理職への昇格－昇給－同じ役割－はるかに少ない監査。

彼女は喜びに跳びはねながらオフィスを出た。少なくとも5年は抱え込んでいた問題が、一週間で消えたのだ。

夜、彼女は私を夕食に連れて行った。

彼女はオフィスで見たときとは違う、上品な装いでやって来た。誰かが身支度を手伝ったのは明らかだった。同僚、友人、娘。みんなが、「放っておかれた人」から「目に見える女」へのその移り変わりに加わったのだ。

夕食の終わりに、彼女は会計をしにレジへ行った。払わずに戻ってきた。店主が彼女を止めたのだ。勘定はもう払われていた。

私は前もって店主に伝えておいた。「彼女からは一セントも受け取らないでください。私の勘定です」

クリスは微笑んだ。それから私に出ようと言った。「家まで送るわ。あなたにふさわしい贈り物をしたいの」

彼女が何を考えているか、私には正確にわかっていた。私は先に行ってくれ、すぐに追いつくから、と言った。

一方、私は空港へ向かった。そして州を出た。

3日後、彼女からメールが届いた。私の振る舞いに失望したけれど、感謝もしている、と書いてあった。彼女の言葉によれば、「私の人生を変えておきながら、見返りに何も求めなかった特別な男」を見つけたのだ、と。

道を外れたFBI捜査官 – 38歳

ワシントンから来た。大きな捜査、重いブリーフィング、他人の人生を決める男たちのいるガラス張りの部屋に慣れていた。いま彼女がいるのは、アーカンソーの郊外の署だ。安いドラッグ、家庭内暴力、頑なな沈黙。彼女の力は役に立たない。彼女の孤独は役に立つ。

私は大使館に自分の能力と弱点を申告するためにそこにいた。標準の手続きだ。私は彼女のオフィスに入る。マリオン、38歳、強制的に異動させられた連邦捜査官。

「ファーストネームで呼び合いましょう、Nando」と彼女はすぐに言った。「教えて。あなたに弱点はある？」

「ある。女だ」

彼女は身をこわばらせた。「どういう意味？」

「彼女たちを助ける。できれば愛する……そして去る」

「なぜ？」と彼女は尋ねた。「あなたたちはいつも同じ歯で噛むけど、私たちにはもっとたくさんの歯があるからだ。行動の問題だよ。すべてを抱えておけるわけじゃない、すべてを引きとめて

おけるわけじゃない」。彼女は今度は自分が分析されたがった。「なら私にもやって。どうして私がここへ飛ばされたのか教えて。あなたに見えるものを見せて」

3分。それ以上ではない。彼女が崩れるには十分だった。

彼女の問題は単純だった。感情をコントロールできないのだ。FBIのような組織では、それは呪いだ。弱くなり、頼りにならなくなり、捜査を取り上げられ、害を及ぼせない場所へ送られる。

私はそれを伝えた。フィルターなしで。

最初、彼女は拒んだ。それから一瞬考えた。そして泣き崩れた。ほかの誰にもその勇気がなかったときに真実を告げてくれる人を抱きしめるように、彼女は私を抱きしめた。

それから彼女は、私の立場を証明する書類に署名した。論理的な行為だった。だが、その署名は感情的だった。

帰り道、私はワシントンに電話した。異動を願い出た。「マイアミに移してくれ。ここには移れない。あそこなら自由になれる」

半年後も、マリオンはまだ私と連絡を取っていた。電話、メール、会いたいという頼み。

私はいつも同じことを言った。「未来はない。私はもう別の場所にいる」

彼女はあきらめなかった。FBIの人間だった。そしてFBIは、狙いを定めたら、すぐには放さない。

製薬工場の女 – 55歳

彼女は国全体のための薬を作る工場で働いている。強烈な皮肉だ。他人を治し、自分を毒する。重い化学物質、きつい交代勤務、半分しか守ってくれないマスク、何からも守ってくれない給料。

誰も彼女の名前を知らない。誰もが、彼女の手を通る錠剤を飲んでいる。

私が入りこんだのは予定外だった。すべてはコロナ後のある夕食で始まった。私は笑いながら、ファイザーを4回打った、全部同じロットだった、そのロットには永続的な効果を保証する「バイアグラ変異株」が入っていた、と言ったのだ。冗談だ。いつもの私の冗談のひとつ。

だが近くのテーブルの誰かが聞いていた。そして話は国じゅうに広まった。それから世界じゅうに。

製薬会社は私に会いたがった。理解するために。確かめるために。なぜならアメリカでは、うまい社会的な噂が株価を倍にすることがあるからだ。

彼らは私を工場に連れていった。入ったとたん、130人が立ち上がって拍手した。私は顔を真っ赤にしていた。彼らは私が「秘密」を明かそうとしていると信じこんでいた。

私は真実を言った。「冗談だったんです」。彼らは信じなかった。

マネージャー、幹部、秘書たちが私を取り囲んだ。誰もが詳細を、確認を、技術的な真実のかけらを欲しがった。

だが私に面談を求めたのは、ひとりの労働者だった。55歳、化学物質でぼろぼろになった手、何年もの見えない労働で曲がった背中。彼女は私と一緒に一室へ通された。入ってきたとき、彼女は沈んでいた。空っぽだった。疲れていた。

私たちは45分話した。

ワクチンの話ではない。ロットの話でもない。奇跡の精力の話でもない。

人生の話をした。普通のことのように見せかけられた失敗の話を。あそこでは誰にもそれを持つ贅沢がないために埋められた夢

の話を。

私は彼女にひとつだけ真実を告げた。「夢を見ることは病気を治さない。でも救ってくれる。そしてあなたが作っているいちばん安い薬よりも安い」

彼女は微笑んで出ていった。同僚たちは、まるで彼女が万能の解毒剤を見つけたかのように彼女を見た。

「彼は何て言ったの？」と彼らは尋ねた。

彼女は答えなかった。そして私も決して言わない。

それは世界でいちばん単純な秘密だった。言葉は、正しい場所に置くすべを知っていれば、空気のなかったところに空間を開く。

そしてその日の彼女には、ただ息をすることだけで十分だった。

エレガントな女泥棒 – 30歳

彼女は本能で盗むのではない。何も持たずに生まれた者を、アーカンソーが許さないから盗むのだ。

教養があり、知的で、恐ろしいほど聡明だ。マネージャーにも、教授にも、コンサルタントにもなれたはずだった。そうはならず、影になった。家から家へ、チャットからチャットへ、身元、約束、逃した機会のあいだを動きまわる。

私は彼女とネットで出会った。Skypeに助けを求めるメッセージが届いた。きれいなプロフィール、暗号のような名前。Last A.。彼女を美しいと呼ぶのは侮辱だった。美しいでは控えめすぎた。泥棒であるのは自然だった。愚かであるのは普通だった。完璧な化粧をした謎。

彼女は私に助けを求めた。私は助けた。

1年で、彼女は1万4000ドルを集めた。すべて彼女の言う必要のためだった。一度も会わない。一度もビデオ通話をしない。一度も

電話をしない。あるのはデジタルの手紙だけ、念入りに練られた頼み、本物に見える緊急事態。

それは私がこれまで受けたなかで、いちばん甘い詐欺だった。

とうとう私は彼女を探しに行くことにした。リトルロック。ビル・クリントンとヒラリー・クリントンの街。

私は彼女の母親のリタに会った。親切で、混乱した女で、娘のことを本当には知らなかった。私を見ても彼女はたじろがなかった。それどころか、息をする人の自然さで、もっと金をくれと言った。

真実が見えたのは、その瞬間だった。

彼女はひとりではなかった。ガーナのあるグループとつながっていた。稼ぎの55%を上納していた。必要に迫られたプロだった。誰もが私に尋ねた。どうしてこんな汚いゲームに引かれたのか。どうして信じたのか。払ったのか。続けたのか。受け入れたのか。

だが答えは単純で、私の内側にははっきりとあった。

助けるためにできている者は、悪いことを考えない。世界が違っていると示しているときでさえ、自分にできる善だけを見るのだ。

エピソード – アーカンソー

アーカンソーは州ではない。ゆっくりとした罠だ。貧困、沈黙、わずかな仕事、そして静かに消えていく人生の網。ここで出会った女たちは救いを求めていなかった。ただ息をする場所を求めていただけだった。

郵便局員の女、国じゅうの秘密の女王は、ただ自分の価値を取り戻したかった。上から落ちてきたFBI捜査官は、犯罪とよりも自分自身と闘っていた。製薬工場の女は、錠剤と化学物質のあいだで見えないまま、少しずつ自分を毒しながら世界を救っていた。

そしてエレガントな女泥棒……彼女はこの州の完璧な象徴だった。知的で、聡明で、それなのに人生が押しつけた道を選ばされた。

アーカンソーは私にひとつの単純なことを示した。ここでは、女たちはできるかぎりのやり方で生き延びる。踏みとどまる者もいる。逃げ出した者もいる。光が一度もそこになかったから、影の中へすべりこむ者もいる。

そして彼女たちはみな、何らかの形で、不在のままだ。いないからではない。誰も彼女たちを見ないからだ。

省察 – アーカンソー

この州で私は、貧困が経済的な状態ではないことを理解した。それは感情の、文化の、精神の状態だ。自分はほかに何も受けるに値しないという、深い確信だ。ここに生まれた者は、書かれていない運命と闘わなければならない。

アーカンソーの女には未来がない。素手で未来を築く。毎日。機会を語りながら、生き延びることしか配らない社会の中で。

私はここで、はっきりとしたものを見た。

女は倒れない。

倒れるにまかされるのだ。

そして本当の罪は貧困ではない。見て、通り過ぎる者たちの無関心だ。

私は通り過ぎない。見て、聞いて、書く。そしてこれらの物語をこの土地から外へ運び出す。そうしなければ、ここにあるすべてのものと同じように、沈黙と、埃と、恥の中に埋もれたままになるからだ。

カリフォルニア

カリフォルニアは州ではない。集団の幻想だ。

遠くから眺める者には、太陽、ヤシの木、映画、テクノロジー、海、アメリカン・ドリーム。下から生きる者には、絶え間ない亀裂だ。絶対的な貧困から数メートルのところにある極端な富、畑での収穫と並ぶハイテクの仕事、閉ざされた邸宅と歩道のビニールのテント。世界じゅうが可能性を探しにやって来て、あらかじめ書かれた序列を見つける場所だ。

女たちにとって、カリフォルニアは偽りの約束だ。－見かけの自由－宣言された権利－見せびらかされる機会。

だがルールはいつも同じだ。ついていけなければ、消える。

ここでの不在は沈黙ではない。システムが振り返りもせずに置き去りにする身体だ。

シリコンバレーの女－39歳

人は「イノベーションの首都」と呼ぶ。だがシリコンバレーは閉ざされた封土だ。そこでは権力は男で、白人かアジア系で、エンジニアリングに根ざし、錯乱に至るほど競争的だ。

ここで女たちは、公式には歓迎されている。－ダイバーシティ・プログラム－企業の倫理規定－ジェンダー平等のパネル－年次報告書の笑顔の写真。

だが重要な部屋の中では、光景は違う。

彼女には学位が二つ、修士号、完璧な英語、高い技術力がある。デジタル製品、データ、プラットフォームの仕事をしている。三人が本物のアイデアを決める会議で一日を過ごす。二人はテーブルに、一人は画面に。

彼らは彼女にソフトスキル、調整力、共感を求める。指揮ではなく、調整の役割を割り当てる。彼女にいてほしいが、主役であってほしくはない。

このシステムでは、母になることは物流上の異常だ。手当、休暇、支援、卵子凍結の設備、社内保育所がある——だがいつも、口にされない条件がひとつついている。ペースを落としてはならない。

妊娠すれば、潜在的な問題と見なされる。しなければ、「スカートをはいた男」と見られ、ほかの誰とも同じように替えがきく。どちらの場合も、彼女は道具だ。決して注目の中心ではない。

夜の会議、「緊急」の週末、アジアやヨーロッパとの深夜の電話は、私生活に影響しないことになっている。システムは完全に応じられることを求める。

崩れたとき——燃え尽き、不安、不眠、意味の危機——答えはいつも同じだ。－ヨガ－マインドフルネス－個人セラピー。

決して構造の見直しではない。決して権力の本当の再分配ではない。

彼女の不在は物理的なものではない。象徴的なものだ。あらゆるプロセスの中にいるのに、最後の評価の中には決していない。

テクノロジーは世界に女性のエンパワーメントの物語を売る。だがその奥深くで、女たちは認められるべき柱ではなく、管理されるべき例外のままだ。

セントラル・バレーの移民－28歳

セントラル・バレーは、観光客が見ず、映画が撮らないカリフォルニアの一部だ。

国の半分を養う農業の回廊だ。－果樹の畑－野菜－アーモンド－ブドウ畑－加工産業。

この風景の中で、移民の女は連鎖を動かす見えない原動力だ。彼女たちはメキシコから、中米から、本当の選択肢のない貧しい共同体からやって来る。多くは書類を持たず、ほかの者は脆い書類しか持たない。そして全員が同じ条件を共有している。彼女たちの存在は、問題を起こさないことにかかっている。

彼女は畑で、温室で、梱包工場で働く。消耗させる交代勤務、曲がった背中、猛烈な暑さ、空気中の農薬、さりげなく絶え間ない監視。口数は少なく、よく見て、すべてを聞いている。

賃金は低く、しばしば実際の最低賃金を下回る。残業時間はいつも記録されるわけではない。病気休暇は保障されない。休んだ者は替えられる。

暴力は広くはびこっているが、しばしば記録されない。－職場でのハラスメント－性的な脅迫－仕事を失うという脅し－当局に通報するという脅し。

訴えれば、すべてを失う危険を冒す。黙っていれば、子どもたちのために何かを家に持ち帰り続けられる。

彼女の不在は制度的なものだ。公的な統計に現れず、代表を持たず、農業が決められる議論に加わらず、エコロジーへの転換や持続可能なサプライチェーンが論じられるときにも意見を求められない。

彼女は、国全体の食べ物を支えながら、公式の物語の中に居場所を持つ権利のない女だ。

カリフォルニアは自らを「グリーン」として売り出す。環境に、健康に、未来に気を配っていると。だがその農業の中心地の畑では、女たちがどんなスローガンも嘘にする条件で働いている。

イメージ産業の女 – 32歳

ハリウッド、テレビのスタジオ、デジタル・プラットフォーム、エージェンシー、広告、ソーシャルメディア。カリフォルニアはイメージの上に世界規模の経済を築いた。この機械の中心にいるのは、表面として使われる女だ。

女優、エキストラ、モデル、インフルエンサー、背景の人物。彼女に対する第一の評価は、倫理的でも、文化的でも、職業的でもない。美的なものだ。

「女の役」には決まった分類がある。－コマーシャル用の若い女－家族向けキャンペーン用の「普通の」女－一部のターゲット向けの過剰に性的な身体－ほかのターゲット向けの安心させる人物。

キャスティングは単なる選考ではない。文化のフィルターだ。誰を見せられるか、誰を売れるか、誰を退けられるかを決める。

あからさまな要求も暗黙の要求も、いつも同じだ。－ある体重に収まること－メイク、修整、改造を受け入れること－型どおりの台本に合わせること－金を払う者に逆らわないこと。

ある場面や状況を拒もうとする者は「扱いにくい」と見なされる。虐待や脅迫を訴える者は孤立させられ、レッテルを貼られ、しばしば沈黙とともに替えられる。

世界的な大キャンペーンはボディ・ポジティブ、敬意、エンパワメント、インクルージョンを語る。だがオフィスの廊下で、オーディションで、制作会議で、本当の基準は古くさく、陳腐で、暴力的なままだ。

ここで女は、イメージとしては過剰に見え、自由な主体としては見えない。

彼女の不在は心理的なものだ。自分自身から切り離され、ブランドに変えられ、自分の価値を数字で測ることを強いられる。再生回数、いいね、フォロワー、エンゲージメント。

看板に印刷されたあらゆる完璧な顔の後ろには、自分がどう表されるかをほとんど決められない人がいることが多い。

ホームレスの女 - 50歳

カリフォルニアには、アメリカでも最大級のホームレス人口もある。

高架下のテント、運河沿いの間に合わせのキャンプ、車の中で、おんぼろのキャンピングカーの中で、住まいの通路に変わった歩道の上で暮らす人々。ロサンゼルス、サンフランシスコ、オークランド、サンディエゴ。貧困はいたるところにあり、目に見え、そして無視されている。

ホームレスの女は二重にさらされている。－ 貧しい女として－ 弱い女の身体として。

しばしばこんな過去を持っている。－ 払えない家賃－ 失った仕事－ 破壊的な別れ－ 家庭内暴力－ 治療されない健康問題－ 麻酔として使われる依存。

夜は決して休息ではない。防御だ。わずかなものを守る。寝袋、バッグ、書類、思い出。社会福祉はある。だがそれは、－ 遅い－ 足りない－ 官僚的－ ときに屈辱的。

ホームレスの女は正確な統計からこぼれ落ちる。襲われないように場所を変え、怖くてシェルターに行かず、子どもを取り上げられるのが怖くて福祉に連れて行かない女たちだ。

彼女の不在は道徳的なものだ。社会は彼女を見ているが、自分の一部として認めない。問題として語られ、決して政治的・経済的な選択の結果としては語られない。

デジタルのインクルージョン、イノベーション、持続可能な未来を語るカリフォルニアは、公共の噴水で髪を洗い、駐車場で着替え、炊き出しのおかげで食べている女たちと共存している。

彼女たちの誰も「極端なケース」ではない。生活費に耐えられない者の転落を避けられないものとして受け入れるモデルの、当たり前の帰結なのだ。

エピローグ – カリフォルニア

カリフォルニアは世界のショーウィンドウであり、同時にその奥の部屋でもある。

外から見せるもの。 – テクノロジー – 映画 – 音楽 – 大学 – イノベーション

内に隠すもの。 – 農業での搾取 – 不動産の不平等 – 極端な不安定 – 依存 – 構造的なホームレス。ここで女たちが不在なのは、女たちが欠けているからではない。イメージの飽和のせいで不在なのだ。

ある場所が女の身体を絶えずいたるところに映し出すとき——画面、看板、動画、広告、ソーシャルメディアのフィード——世界には、女が中心にいるという幻想が与えられる。

現実には、 – テクノロジーで働く女はほとんど決定権を持たない – 畑の移民は耳を傾けてもらえない – イメージの職業の女はあらかじめ作られた役に押しこめられる – ホームレスの女は視線ごと避けられる。

カリフォルニアは証明している。不在とはただの空虚ではない。本当の力をともなわない過剰な表象でもありうるのだ。

ここは、女がいたところに現れながら、世界が想像するよりずっと認められていない州だ。

省察－カリフォルニア

アラスカでは、不在は霜だ。アラバマでは、歴史だ。アリゾナでは、国境だ。カリフォルニアでは、化粧だ。

ここでは、女の不在はこんなものに覆い隠されている。－進歩的なスローガン－正しい広告キャンペーン－平等についての会議－やる気を起こさせるストーリーテリング。

人は「インクルージョン」を語る。だが本当のインクルージョンは、三つの具体的な指標で測られる。－誰が決めるか－誰がより多く支払われるか－誰がノーと言う余裕を持てるか。

この三つの点で、カリフォルニアの女たちは――あらゆる社会階層にわたって――あまりにしばしば置き去りにされている。

－マネージャーは、完全な権力を求めないかぎり許容される－移民は、抗議せずにきつい仕事をこなせるかぎり放っておかれる－イメージの職業の女は、ターゲットに合っているかぎり使われる－ホームレスの女は、交通や体面の邪魔をしないかぎり無視される

世界は未来を理解するためにカリフォルニアを見る。だがもしそれを浮かばせている女たちを本当に見たなら、ひとつの単純な真実を見いだすだろう。

未来はない。当たり前にしてしまう場所には。その不在とは

それを支える者たちの不在だ。

だからこそ、カリフォルニアはこの巻に収められている。神話としてではなく、絵葉書としてではなく、敵としてでもなく。証拠として。

世界の想像力の首都のひとつ。そこで最も見えにくいものは、いつも同じままだ。決して画面に映ることのない女たちの、本当の人生。

コロラド

コロラドは単純なふりをしているが、そうではない州だ。二つの極のあいだで生きるアメリカだ。

－守ってくれるように見える山々－社会の実験室として機能する都市

清潔で、整然として、表面的には進歩的な土地だ。だがはっきりとした矛盾を抱えている。法外に高い生活費、目に見えない隔離、技術的な仕事、ゲーテッド・コミュニティ、静かな社会的孤立。

ここで女たちが消えるのは、あからさまな暴力のせいではない。過剰な秩序、文化的な圧力、息が詰まるような社会の期待のせいで消えるのだ。

コロラドは多くを求め、わずかしかな返さない州だ。そこに暮らす女たちは難しい均衡を保っている。

－技術と頭脳の仕事－完全にそこにいることを求める家族－観察し裁く共同体－居場所のないメンタルヘルス－「生活の質」に偽装された地理的孤立。

ここは、誰かに押されて倒れる州ではない。すべり落ちていくのを誰も見ていないから倒れるのだ。

デンバーの女－35歳

デンバーは現代的で、機能的で、清潔だ。誰もがテクノロジー、スタートアップ、生活の質を語る。だが実際には、女に多くを求め、驚くほどわずかしかな返さない街だ。

彼女は専門職だ。－学位－技術力－安定した仕事－中の上の給料。

紙の上では、すべてが完璧だ。

彼女は絶え間ない圧力の下で生きている。成果、目標、会議、プロジェクト管理、毎週の測定可能な結果。

企業はワークライフバランスを語る。だが絶え間なく応じられることを求める。

彼女には高いアパート、詰まった予定、細かく組み立てられた生活がある。貧困から落ちていくのではない。疲弊から落ちていくのだ。

彼女の不在は精神的なものだ。いつも働き、いつも考え、すべてをまとめている——何かが壊れるまで。そして壊れるときは、静かに壊れる。

山の師匠 – 42歳

デンバーとボルダーの外に出ると、コロラドは顔を変える。山々、小さな共同体、冬にはわずかな人しか残らず、夏には観光客が写真を撮りに押し寄せる町。

ここで教師は土地の柱だ。－教える－導く－寄り添う－誰をも知っている－心の支えである－子どもたちにとっての大きな家族である。

彼女は雪と、孤立した道と、小さな学校のあいだで暮らしている。仕事量は膨大で、給料は限られている。

彼女の不在は制度的なものだ。共同体を支えているのに、政治の決定には決して加わらない。国全体を浮かばせるために働きながら、認められない女だ。

先住民居留地の女 – 30歳

コロラドの「見えない」部分は、その居留地だ。現代性よりも歴史のほうが重くのしかかる地域。

先住民の女は三つの層の抑圧を生きている。－構造的な貧困－内側の家父長的な文化－外からの制度による見捨て。

彼女はしばしば社会プログラムで、部族の学校で、最低限の設備しかない医療センターで働く。依存、うつ、家庭内暴力、そして完全に孤立させる地理的な距離と闘っている。

彼女の不在は文化的なものだ。現代のコロラドは彼女を自分のアイデンティティの一部とは考えず、彼女の共同体も、自分を作り直す彼女の権利をいつも認めるわけではない。世界が無視するあいだ、ひとつの民族全体を支えている女だ。

スキーリゾートの女－27歳

アスペン、ベイル、ブリッケンリッジ、テルライド。贅沢、金、ウィンタースポーツ、季節の経済。

ここで働く女――ウェイトレス、バーテンダー、リフトの係員、受付係、インストラクター――は二重の世界を生きている。

－とてつもなく裕福な観光客－すべてを支える労働者

決まった時間もなく働き、給料は安く、しばしば不安定だ。家賃を払うために、ほかの労働者とちっぽけな部屋を分け合っている。

富に囲まれていながら、孤立したままだ。傲慢な観光客、季節雇いの管理者、絶え間ない要求に向き合わなければならない。

彼女の不在は経済的なものだ。すべての者に富を生みながら、貧しいままだ。

エピローグ－コロラド

コロラドは完璧に見えるが、そうではない州だ。整然として、豊かで、現代的で、社会的に均衡がとれている――紙の上では。だがその女たちは三本の断層の上で生きている。

－精神的な圧力－土地による孤立－制度の不在

スキャンダルも、大規模な暴力も、混沌もない。そしてまさにそのために、彼女たちの不在はいっそう重い。

ここで女たちが倒れるのは、誰かに押されるからではない。誰もが、彼女たちは持ちこたえられると思いこんでいるから倒れるのだ。

省察－コロラド

コロラドの女たちの強さは、騒ぎを起こさないことだ。そしてニュースにならないことだ。

それは微妙で、現代的で、知的な不在だ。見分けるのは難しく、無視するのはたやすい。

コロラドは単純なことを教えてくれる。不在とは、貧困や、暴力や、寒さや、閉じこめられることだけではない。秩序でもありうる。豊かさでもありうる。期待でもありうる。

女が混沌ではなく、「すべてうまくいっている」に押しつぶされるとき、問題は目に見えない――だが現実だ。

だからこそコロラドもここにある。女の不在の顔はひとつではないことを思い出すために。顔は50ある。州ごとにひとつ。

コネチカット

コネチカットは、多くの人が思い描き、本当に知っている人は少ない州だ。外から見ると優雅だ。非の打ちどころのない町、清潔な郊外、優れた学校、高いガソリン、整った歩道、完璧な芝生のある家。アメリカの「上の」側、決して声を荒らげず、組織し、統治し、管理する側だ。

ここではすべてが均衡しているように見える。だがその均衡は自然なものではない。絶え間ない圧力であり、体面の、見かけの、期待の、途切れることのない維持だ。

コネチカットは輝けとは求めない。決して間違えるなど求める。

三つのことが真実であるときにだけ、よく暮らせる州だ。－社会的な競争－感情のコントロール－共同体の無言の裁き

ここで女たちが消えるのは、貧困やあからさまな暴力のせいではない。強いられた適応のせいで消えるのだ。礼儀正しい消え方。叫びもなく、スキャンダルもなく、ニュースもなく。

洗練された不在だ。だが、それでも不在だ。

保険会社のオフィスレディ－40歳

コネチカットはアメリカの保険の首都だ。ハートフォードはいたるところでそれを掲げている。「Insurance Capital of the World」。

そのスローガンの後ろには、終わりのない画面の前に座る何千人もの女たちがいる。－苦情－保険証券－リスクのアルゴリズム－デジタルの書類－手続き－指標。

彼女たちの仕事は正確で、技術的で、細かく管理されている。ひとつのミスが会社には金を、彼女たちには時間を失わせる。あらゆる決定は正当化され、記録され、承認され、検証されなければならない。

一日は管理の連鎖だ。

彼女はすべてをまとめている。システムが彼女に非の打ちどころのなさを感じているからだ。そして給料はいい。ほかの国と比べれば、すばらしい。

だが感情の代償はきわめて高い。

ここの女たちは崩れない。音もたてずに、ゆっくりと空っぽになっていく。このオフィスでは誰も、あなたがどうしているかを尋ねないからだ。尋ねるのはただ、「調子はどう？」だけ。

彼女の不在は精神的なものだ。毎日そこにいるのに、自分自身から切り離されている。

裕福な郊外の女 – 45歳

コネチカットの裕福な地域は別世界だ。巨大な家、静かなSUV、完璧な庭、私立学校、古い社会の規範。

ここで女たちは、いつも「外で」働くわけではない。社会のシステムの内側で働く。

彼女の役割は文化的なものだ。－非の打ちどころのない母－足並みをそろえた妻－委員会での存在感－家の切り盛り－予定に組まれたボランティア－完璧なイメージ。

崩れても、それを口にできない。不幸でも、それを見せられない。孤独でも、誰にも知られてはならない。

彼女の不在はアイデンティティのしるしだ。演じなければならぬ役割の後ろに消えていく。

「すべてが完璧」な場所では、ひびをひとつでも見せる余裕はない。

優雅な牢獄だ。だが、それでも牢獄だ。

エリート大学の女 – 34歳

ニューヘイブンには、地球上で最も名高い大学のひとつがある。イェールだ。

学問の環境は進歩的で、現代的で、細やかに見える。だが表面の下には、硬直、激しい競争、天井知らずの期待がある。

女性研究者はひとつの逆説を生きている。－教養がある－有能だ－準備ができている－文化の生産の中心にいる。

だが同時に、システムに押しつぶされている。

論文、学会、研究助成、記事、指導、授業、内部の人間関係。生活と、頭と、身体にしみこむ途切れない努力。

女性の同僚はしばしばライバルだ。男性の同僚はいまも歴史ある講座を支配している。

彼女の不在は制度的なものだ。彼女が生み出す知は大学を支えているのに、彼女のキャリアはより遅く、より不確かに、より宙づりのまま進む。

多くは耐える。多くは去る。

イェールは完璧なままだ。彼女たちはそうではない。

混住地区の女－31

歳

裕福な郊外の外、エリート大学から遠く離れたところに、本当のコネチカットがある。低い賃金、高い家賃、不安定な仕事、混じり合った共同体、そしていつも機能するとはかぎらない社会制度。

ここで女たちは隠れた柱だ。スーパーマーケットで、公立学校で、グループホームで、福祉サービスで、小さな商店で、基礎的な医療で働く。すべてを支えている。－安い給料の仕事－子どもたち－大家族－遅い公共交通－絶え間ないストレス。

彼女の不在は経済的なものだ。たくさん働き、わずかしこ稼がず、少しも前に進まない。

そして際立った逆説の中で生きている。アメリカで最も豊かな州のひとつに住みながら、その豊かさの一部だと感じられない。

ここで富は私的なものであって、社会的なものではないからだ。

エピソード – コネチカット

コネチカットは「安全」で、「清潔」で、「安定」して見える。そしてある意味では、そうだ。

だがそれはまた、女が音もなく最もたやすく消えていく土地のひとつでもある。暴力のせいでも、飢えのせいでも、寒さのせいでもない。社会の期待のせいだ。

なめらかな表面の欠如だ。混沌もなく、叫びもなく、目を引く統計もない。高い要求と低い報いに押しつぶされた人生があるだけだ。

すべてがうまくいっているから、誰も気づかない。そしてまさにそれが、これを危険にしている。

省察 – コネチカット

多くの州で、不在は目につく。ここでは控えめだ。礼儀正しい。「普通」だ。コネチカットは示している。女は持つことができる。家を、仕事を、収入を、安全な地区を、立派な共同体を。

そして同時に、人としてはまったく見えない存在であること。

社会の完璧さは薄い刃だ。微笑むことを求めながら、あなたの居場所を奪っていく。

コネチカットは教えてくれる。不在は、秩序が多すぎることから、体面が多すぎることから、管理が多すぎることから生まれると。

そして女が完璧でなくてもそこにいられるようになるまで、どんな社会も本当に進んでいるとは言えないと。

デラウェア

デラウェアはつかみどころのない州だ。小さく、静かで、財政的に締めつけられている。些細なことのように見えるが、アメリカが動くうえで欠かせない部分だ。

ここには巨大な大都市も、砂漠も、山も、まばゆい鏡もない。あるのは隠れた経済、目立たない政治、静かに何十億も動かす官僚機構だ。

デラウェアは、アメリカが会社を登記し、金を保管し、帳尻を合わせる場所だ。真ん中にある場所。豊かすぎず、貧しすぎず、うるさすぎない。

完璧なグレーゾーンだ。

デラウェアでは、女の不在は爆発しない。蒸発する。ゆっくりと、着実に、数字にも公の議論にも見えないまま。ここで女たちが消えるのは、無言の過重負担のせい、取るに足らないと思われるほど小さな仕事のせい、決して国の物語に入らない役割のせいだ。

企業のオフィスレディ – 38歳

デラウェアは100万を超えるアメリカ企業の法的な本拠地だ。会社の書類、合併、信託、所有権の変更、税務書類、何十億もの取引を保管している。

世界は、この仕事は大物のマネージャーがしていると思っている。だが実際にしているのは、窓のない仕切りの中に座り、終わりのない書類の流れをさばく女たちだ。

彼女は規則と手続きと管理に満ちた整然としたオフィスで働く。ミスはほとんどしない。ひとつのミスが何百万もの損失になりうるからだ。速く、正確で、見えない。

彼女の一日はこんなものでできている。書式、署名、プロトコル、チェック、メール、チェックリスト。

彼女の仕事はひとつの経済システム全体を支えている。だが誰もそれを見ない。誰もそれを認めない。誰もそれを語らない。

彼女の不在は構造的なものだ。権力の物語に一度も現れることなく、紙の帝国を浮かばせている。

倉庫と物流の女 – 33歳

デラウェアは官僚機構だけではない。港であり、貨物の往来であり、倉庫であり、サプライチェーンでもある。

ここで女はこんな場所で働く。– 冷凍倉庫– 仕分けセンター– 工業用倉庫– 食品会社– 夜間の調整業務。きつい交代勤務、速いペース、曲がった背中、冷えた空気。繰り返しの動作、けがの危険、絶え間ない監督。

給料は低い。契約はしばしば不安定だ。生活にはゆとりがない。

彼女の不在は経済的なものだ。懸命に働き、わずかしこ稼がず、決して成長しない。

世界が大都市だけを見ているあいだ、商業の隠れた部分を支えている女だ。

プライマリケアの女 – 47歳

デラウェアには巨大な医療制度はない。あるのは最低限の、ひどく脆いプライマリケアの網だ。

ここで女が支えているもの。– 老人ホーム– 小さな診療所– 地域のクリニック– 在宅介護– ひとり暮らしの高齢者の支援– 忘れられた慢性疾患の患者。

彼女の仕事は感情的で、身体的で、途切れることがない。耐えられる以上の苦しみを目にする。認められることなく時間外まで働く。受けるに値するより少なく稼ぐ。

彼女の不在は社会的なものだ。州が届かないところで州の代わりをしているのに、誰も彼女をシステムの欠かせない一部とは考えない。

彼女がいなくなると、すべてが崩れる。だが彼女が働いているあいだは、誰も気づかない。

低所得地区の女 - 29

歳

デラウェアにも脆い部分がある。貧困、家庭内暴力、ドラッグ、放置に刻まれた地区だ。ここで女たちは三つの問題に同時に向き合う。不安定な雇用、上がり続ける生活費、わずかな社会的保護。

彼女はレジ係として、清掃員として、季節労働者として、ベビーシッターとして、調理補助として働く。他人の家を洗い、掃除し、世話をし、整える。

彼女の一日は駆け足だ。子どもたち、バス、交代勤務、買い物、家、問題。

彼女の不在は都市的なものだ。再生を語りながら、最悪のときにそれを浮かばせている女たちそのものを置き去りにする街に暮らしている。

エピソード - デラウェア

デラウェアには、カリフォルニアのドラマも、アラスカの凍える寒さも、南部の厳しさもない。

そこには違う何かがある。見えなさの一形態としての普通さだ。

ここでは、女の仕事は音をたてない。それはこういうものだからだ。－技術的－反復的－欠かせない－静か－物語になりにくい。

爆発は決して起こらない。あるのは絶え間ない摩耗だ。

女たちは見出しにならない。大勢で抗議しない。居場所を求めない。ただ耐える。

そしてまさにそれが、彼女たちを見えなくしている。

省察－デラウェア

デラウェアは、女の不在がさらに陰湿な形をとりうることを示している。沈黙の完璧な管理だ。ここで女たちは原動力だ。－官僚機構の－調整の－基礎的な医療の－最低限のサービスの。それなのに、彼女たちは決してアメリカの物語に現れない。不在は騒音ではない。背景だ。そしてデラウェアがその証拠だ。国がいつも通り過ぎていく場所、だが女がいつも立ち止まったままの場所。

Ferdinando Frega